

- 1.0 7時45,6分（しちじよんじゅうごろっぷん）
- 1.1 道々行々（みちみちゆきゆき）
- 1.2 「ありがとう」の寺
- 1.3 ふとほっとするすっとするぼーっとする
- 1.4 再生装置／サイセイソウチ

【1.0 7時45,6分（しちじよんじゅうごろっぷん）】

7時45,6分 もうそろそろ 小雪ちゃん来る。
特になんかするわけでもない朝なのに、
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
一人で精神統一 問いではなく答えがいる ふう…

7時47,8分 本当にもう 小雪ちゃん来る。
特になんかするわけでもない朝なのに、
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
一人でネガティブなシミュレーション（狙い…不安…趣味…テンション…） ああ…

7時51,2分 本当にもう 小雪ちゃんが来た。
特になんかしたわけでもない朝なのに、
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
太陽は燦々と山を越え、小雪ちゃんとお母さんの声、ああ…

8時1,2分 本当にもう 小雪ちゃんがキレている
ごめんなさい 完全に、状況に則し逃げている。
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
今さら顔を合わせられない けどこれが毎朝だから ああ…

8時27,8分 もうそろそろ 私マジに死ぬかも
リビングから談笑 デッドオアリビング リスク伴うダンジョン
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
こうなったらやむを得まい 今日は家から出ない 夏の願い ああ…

8時52,3分 小雪ちゃんもどうゆう試算で組んでる？
もう共倒れだよ？ 大人の手からは逃れられないよ？
小学生の私はその時間を大抵トイレで迎える。
早く帰れ小雪ちゃん 学校くらい1人で行け…ふう

あ、そういうこと？

1人じゃいけない理由があるのか 1人じゃなしえない自由があるのか
でも少し分かるのは 確かに 1人じゃ見えない自分がある
小雪ちゃんは唯一の私の鏡 名無しの墓には入れられない…ふう

9時9分 田端小雪が内林麻来をトイレから無事救出
母の呆れた顔も見慣れた それからやっと着替えた
乗り切れない気持ちは無情にも毎朝 迎えにくる彼女に断ち切られるのは
今思えば救いの手 これは私が思い出を探る日の絵

【1.1 道々行々（みちみちゆきゆき）】

母親に一通り怒られて外に出れば いろんな後悔が同時に押し寄せる
歩く とらえどころのない野良猫 触りたいけど今は堪えよう
並ぶ 電柱の無機質に 冷やかな青春の浮き沈み
うちの背丈を越えて生い茂る 草木をくぐり行く2人

国道沿い 広大な土地 でも小さな町 田舎育ち 未だ同じ
いらぬプライド 知らない人もいない 出くわせば挨拶 この街のアイドル
みたいなお婆ちゃん 学校の噂じゃ140歳 ギャグかも実際
分かってない 今では誰も確かめようのない 日々の連なりは…

雑草 緑 ブレス フレーバー みちみちゆきゆき
途中で止まらないひとつなぎ名場面 みちみちゆきゆき
妄想 一通り 暮らしのプレイバック みちみちゆきゆき
今と変わらない あの日のステータス みちみちゆきゆき

遠くに小さく学校が見えてくれば いろんな後悔が同時に押し寄せる
小雪ちゃんと時間通り家を出てれば違った印象・光景 問われる品行方正
振る舞いには特に問題はないはずだけど 人の輪から外れようとする彼女は誰も
信用してない 信頼してない 私は…??

私はいまいち中途半端 家族も友達もいる 好きな人もいる だけど大きな声で
誰かに表明できるものではなく ひっそり胸の中に抱え それだけが支え
大事なものと 大事なことの 往復 その道中にずっと小雪ちゃんがいてくれる…

雑草 緑 プレス フレーバー みちみちゆきゆき
途中で止まらないひとつなぎ名場面 みちみちゆきゆき
妄想 一通り 暮らしのプレイバック みちみちゆきゆき
今と変わらない あの日のステータス みちみちゆきゆき

【1.2 「ありがとう」の寺】

私たちはほとんど毎日私のせいで遅刻して学校に着くもんだから校門からは入らず、外周を回って裏口の小さな門から入る。学校の裏にはお寺がある。名前も知らない古びたお寺。私の記憶の彼方にはそこで夏祭りをしていて、夜店が出たり、こんなに寂しい田舎町でもそれなりに人が集まってそこにぎわったりしていた風景が残っている。だけど、それは思い入れや愛着みたいなことには繋がらず、ただなんとなく薄気味悪いお寺、なんで学校の隣にあるのかお寺という気持ちで、その気持ちは、気持ちいいものではなかった。

小雪ちゃんはクラスに馴染めないタイプだった。典型的な暗いやつとか浮いてるやつとかではない、どちらかというとなし。私が言うのもあれだけど存在そのものに名前を付けられない。もとい、その存在を見つけられない。確かに居るのに視界に入らない。だから遅刻しても怒られない。だから私に付き合っ一緒に遅刻してくれるのだろう。私は怒られて笑われて頭をなるべく床と平行になるくらいに下げて席に着いて、そうすると周りからくすくす笑われたり、今日も遅刻かよといじられたりする。それが最初は恥ずかしくて、なのに、なのにと
というかそのせいでまた学校に行く気持ちが毎朝しらけていくことも分かっている完全に悪循環負のループだった。だけど小雪ちゃんは違う。遅刻したことに気付かれないし、顔を下げて席に着くこともない。誰も笑わない。いじらない。でも無視されてるわけでもない。ジグソーパズルのグレー一色のピースが、台紙と同じ色だからなくてもあるように見えるし、あってもないように見えるのと同じように、居ても居ないように感じるし、居なくても居るように感じられる。私はそんな話を小雪ちゃんから聞いて、まだ私はマシなんだと複雑だけと思った。

小雪ちゃんは私のことを気にして、毎朝校門の前で私と別れるようにしてくれていた。私と一緒に通学していることがバレないようにと言っていたけど、いてもいなくてもいっしょの小雪ちゃんと通学していたところで、そんなことでいじってくる人なんかいなかったし、本当は私のためじゃなくて、自分のため、校内でのヒエラルキーや人間関係、その様々なレイヤーによってちょうどぴったし存在を消せていることが楽だから、私のような人間の色を付けられるのが嫌だったんじゃないと思う。確かに、田端小雪と内林麻来と一緒に登校しているなど、学校内の先生も含めてただの1人も知らないんじゃないかと思うし、だからと言って知ったところで誰も何にも思わないとも思うけど。

ほとんど毎日、その裏門の前で小雪ちゃんと分かれる時、なぜか小雪ちゃんは私に「ありがとう」って言う。私は「え、あ」と戸惑う。向こうは「え、あ、じゃねえよ」って笑って言う。私は「こちらこそ」って言う。こちらこそ一緒に遅刻してくれてありがとう。そしたら向こうは「じゃあ行くから」って言う。それで1人で言っちゃう。小雪ちゃんは美人だ。小雪ちゃんが照れたりそれを隠したりしながら「ありがとう」ってのはにかむ背景にはお寺とその周りの木々たちと光。ぴかぴかの逆光の中、影で表情を隠しながら、小雪ちゃんは私に「ありがとう」って言う。毎日。それが物理的な意味でも眩しくて、私はそのお寺を〈ありがとの寺〉と呼ぶほかなかった。

【1.3 ふとほっとするすっとするぽーっとする】

あれは誰かが何か言っていた時 私後ろ向いて座ってた時
声の向きに向いていたらきつととばっちり 男子は争う 女子は作る派閥
あれは不安に襲われた時 簡単に気持ち説明できない時

それは嫌なニュースを目にした時 あったはずのアイスがなかった時
災い・事故 でも泣かない人 叶わない意図
それは聞き逃せない言葉に傷ついて うろ覚えのトラウマが疼いた時

あれはまともな人が居なくなった時 自分しか信じられなくなった時
今ここから逃げ出したいけど逃げ行く場所もない お芝居みたい 空間の支配
あれはそんな時 確かそのどれもに該当する時
朝をひたすら待っていた

具体的に言えば あいつとあいつの喧嘩 巻き込まれて変化する関係の劣化
このメンバー限定の話題 うわさ話 外に持ち出し 奪い合い つじつま合わない

戦争みたいな相互の攻撃 配慮の反対 孤立して食べる弁当は配給みたい
常にペースを乱される 正論もいなされる 何一つ押し量れない

だったらなんだろう
私っているんだろうか
この教室に こいつらの脳に
留まりたくない 関わりたくない
いっせいのせ で 全員で無になる
だったら楽かも
空気変わるかも
私にできることなんてあるかを
探すだけで有意義？ 実際は無意味
移せない行動 働かない思考

だったらなんだろう
私っているんだろうか
この教室に こいつらの脳に
留まりたくない 関わりたくない
いっせいのせ で 全員で無になる
だったら楽かも
空気変わるかも
殺伐とした教室に笑う顔
小雪ちゃん発見 存在の復権
無になろうと失おうとしてた私に「向き合おう」

...

あれは誰かが何か言っていた時 私後ろ向いて座ってた時
1人の女の子 クラスの隅っこ 灰色から白 名前の無いヒーロー
あれは世界に危機が迫った時 その恐怖を全員が忘れた時

あれはまともな人が居なくなった時 自分しか信じられなくなった時
今ここから逃げ出したいけど逃げ行く場所もない お芝居みたい 空間の支配
あれはそんな時 確かそのどれにも該当する時
朝をひたすら待っていた 小雪ちゃんが迎えに来てくれるのを

【1.4 再生装置／サイセイソウチ】

今とくにもう小雪ちゃんとの繋がりは無くなったけれど、その記憶は私にとってあの頃を再生する装置のひとつだ。その記憶と、あとは小雪ちゃんのおすすめのバンド。今でも聴いている。小さな田舎町に小さな TSUTAYA のようなレンタル CD ショップがあって、そこにはレンタルビデオ、ビデオがまだあって、ボロで、田舎を象徴する匂いと共にそこに存在していた。そんな田舎のショップにも置いてあるくらいには当時まあまあ売れていたバンドだったわけだけど、学校でこのバンドのを知っているのはおそらく私と小雪ちゃんだけだったと思う。私は小雪ちゃんに勧められるがまま、聞いて、覚えて、学校への道中、2人で歌っていた。だけどこれは記憶違いかもしれない。私が帰り道、ひとりで寂しさを押し殺すように、小雪ちゃんと帰りたいなどその思いが言葉ではなく歌としてはみ出すように、口ずさむのではなく、もはや懇願の形で、表れていたのかもしれない。それは結局のところ覚えていない。何も覚えていないことが自分と過去が出逢い直せる、空しいけどささやかな生きる希望を得るチャンスだと言っている。この場合わたしはわたしをめぐって肯定する材料をそこからゲットしている。だから小雪ちゃんに教えてもらった歌は、CD もバンドも実在している以上そこに捏造はなく、だから本当で、小雪ちゃんと聴いていたのも本当で、問題は私がそれを歌っている時、ひとりだったか、2人だったかどうだったかの話だけだ。そして、それはいっそ忘れてしまってもいい。音楽は私がおばあちゃんになっても残る。データとして事実として、バンドのことも歌のことも全部本当だし、残る。歌詞を見れば60年後だって歌える気がする。残ることはすごい。記憶も物も。だけど消えていくこと、残らないこと、忘れ去られること、誰もが捨ててしまうこと、データも、物理的なものも、感覚も、感情も、何も残らないことも同時にすごくすごい。すごいし、それにそれくらいだれのあたまにもからだにもいちみりもそれがなくなってしまうとしても、それは本当はあったんだから、それがまたすごい。ありがたいの寺がなくなり更地になり、場所だけではなく宗教自体もなくなり、木という有機物もなくなり、私もなくなり小雪ちゃんもなくなって、空気がなくなって、振動がなくなって音も声もなくなって、人もいなくなり、人みたいな身体で顔だけハダカデバネズミみたいな新種の、私たちとは考え方も心のおもむきもなにひとつカスらない生命体がこの世界を支配したとしても、だとしても、私が小雪ちゃんの笑顔にやられ、ありがたいの寺と名付けた寺は、なくなる。いや、なくなっても、すでにないとしても、なくなるから、すごいのだ。だから、それをくれた小雪ちゃんに、本当にわたしのほうがありがたいだし、小雪ちゃんはきっとそんな大事なことを伝えそびれた私を、いずれなくなる未来の先の彼方の向こうの遠くの方で、しかめっつらのような笑顔で、ひたすら許してくれています。